



←  
富山県立南砺福野高校にある「巖浄閣」  
(旧富山県立農学校本館・解体修理さ  
れた国重文)。復元された正門には「富  
山県立農学校」の門標が掲げられる

平成24年11月14日  
茨城県立土浦第一高等学校  
進修同窓会旧本館活用委員会



←  
「巖浄閣」について、  
説明を熱心に聴取す  
るとともに、質問を  
する視察団一行

今、ホットな話題と言えば、辰野金吾が設計した「東京駅赤煉瓦駅舎」復原完成。その東京駅より10年前の明治37年に竣工したわが旧本館は、辰野金吾の愛弟子駒杵勤治が設計。築後108年が経ち、壁のひび割れ、雨漏り、柱の腐朽など破損・損傷がかなり進み看過できない状況に。そこで、焦眉の急を要する抜本的改修に向けて、今年の文化財校舎視察は、根本修理がすでに終了している富山県立南砺福野高校を訪問。今号はこの視察模様を取り上げたい。

## 視察先は旧富山県立農学校本館

「早急に旧本館の抜本的改修を！」と  
思いを定めた進修同窓会は、今年5月に  
「旧本館校舎改修促進委員会」を発足さ  
せ、関係方面への働きかけに本腰を入  
れていく方針を確認し、走り出している。  
改修工事については、平成15年に「10  
年以内に根本修理が必要」との(財)文  
化財建造物保存技術協会の調査結果を  
受けて、平成17年2月に要望書を提出  
しているが、現在に至るまで大きな進展  
がないまま歳月を重ねてきている。この  
間に大震災もあり、壁のひび割れ、雨漏  
り、柱の腐朽、窓枠の変形などの破損・  
損傷は明らかに拡がっている。今般の発  
足は、旧本館を預かる者として、この深  
刻な事態を目の当たりにし、これ以上座  
視することはできない、という強い責任  
感と使命感の発露と言えなくもない。

こうした動きの渦中であって、今年の  
文化財校舎視察は、議論百出の中から、  
昨年と同じ、富山県南砺市の県立南砺福  
野高校敷地内にある旧富山県立農学校  
本館「巖浄閣」(小紙第39号で詳述)が  
最も適当である、と意見が集約された。  
この建物は、本校と同じく旧制中学校等  
の校舎として平成9年に国より重要文  
化財の指定を受け、すでに平成17年に  
解体修理を完了させている。そのため、  
直近の修理の実情やそれに至る同校の  
取り組み、諸団体・諸機関との連携協力、  
総工事費予算内訳・調達等について、つ  
ぶさに状況を聴取できるとともに、保  
存・管理運営に関する調査研究にも資す  
る、と判断されたのだ。しかも、一泊二  
日の日程で視察可能な地域でもあった。



「巖浄閣」の裏側、  
手前は出入口(上)。  
資料を収める本格的  
陳列ケース(左)

## 平日の視察でも参加者は22名

視察団一行は、8月30日午前7時、  
「旧本館の改修促進」の旗幟を鮮明にし、  
本校玄関前より一路北陸道へと旅立っ  
た。諸般の事情により、実施日が2日間  
とも平日を余儀なくされ、視察を断念せ  
ざるを得なかった人々がいる中で、参加  
者は22名。特に「同窓会の総力をあげ  
て！」の要請に呼応し、「少しでも力に  
なれば」と、多方面から同窓会員の皆  
様が駆けつけて来られた。さらに文化財  
関係者と、学校側から武井秀一校長(高  
23回卒)・杉山博副校長(高24回卒)に  
も加わっていた。いずれにせよ、多  
事多端な日々を過ごされている一人一  
人が、万難を排してお越しくくださったの  
だ。まさに厚意と温情に支えられて、今  
年も実現した文化財視察なのだ。そして  
互いに初対面であっても、「一河の流れ  
を汲むも多生の縁」というように、本校  
または旧本館に、ひとかたならぬ愛着や  
親近感を寄せる真心がにじみ出て、すぐ  
に言葉を交わし合う光景を現出させる。  
バスが常磐道を走行する中、車中では  
視察にあたっての挨拶が始まった。最初

に、幡谷浩史進修同窓会会長(高4回卒)  
の代理として、大曾根宏亮副会長(高4  
回卒)が視察の目的と多忙な中での参加  
に感謝の言葉を述べた。次に数名の方々  
からご挨拶をいただき、最後に、武井校  
長が学校の現況等を報告し、セレモニー  
はひとまず幕を閉じた。

## 車中に見る「修復工事記録」映像

30度を超える暑さに辟易しながらも  
妙高SAで昼食をとり、その後、バスの  
ディスプレイ画面には、昨年の訪問の際に  
入手した「旧富山県立農学校修復工事記  
録」のDVD映像が映し出された。そこ  
には、「歴史と設計」「旧校舎の移築と思  
い出」「保存運動と重要文化財指定」「解  
体・調査・修復」と、4つテーマ(観念)  
が設けられ、修復工事の一部始終が40  
分余りにわたり克明に記録されている。  
特に「解体・調査・修復」では、朽ちて  
ポロポロとなった部材が次々と解体さ  
れていくシーンが画面全体に繰り広げ  
られていたが、それこそ圧巻であった。  
このDVD等を通して、現地に到着す  
る前に、視察する建物の文化財的要素や  
解体修理の概要については、一応把握で  
きていたといつてよいのかもしれない。  
その後、バスが北陸道に差しかかる頃  
から一天掻き曇り、今にも泣きだしそう  
な空模様となる。そして車窓に水滴が伝  
い出している午後2時前頃に、視察先に  
バスが近づくと、前方に桜色の木造2階  
建て校舎が目飛び込んできた。威厳と  
気品に満ちた佇まい、「巖浄閣」である。  
建築面積は、本校旧本館のほぼ3分の1  
の333・82㎡。修復工事費は3億7千百  
万円かかったという国の重要文化財だ。

## 視察校における説明と質疑応答

雨の中、傘をさして出迎えてくださったのは、同校の同窓生であり、旧職員でもあった中島良夫・竹下宏子の両先生。さっそく、「巖浄閣」内の学習室に案内された。そこで、南砺福野高校の校長先生より歓迎の挨拶を賜るとともに、両先生による熱のこもった説明をうかがうことができた。以下、その内容で印象深かったところを列挙してみたい。

- 復元の段階で、建物に悪影響を及ぼすとのことで、周囲の樹木は伐採した。
  - 校舎の色をグリーンか、桜色かで意見が分かれた。明治36年建築当初はグリーンであり「復原」という意味からすればグリーンだったが、最終的には、多くの同窓生にとっても馴染み深く、大正年間に塗り替えられた桜色に落ち着いた。
  - 工事は、県と国が半々で負担した。同窓会では、3千6百万円ほど募金を集めたと聞く。
  - 最近では、この建物で書道展や友禅染展を開催し、特に友禅染展の際には「友禅の魅力を語る」と題してギャラリー・トークも行った。
- 説明が終わると、質疑応答に移る。以下、これまたその一部を記してみる。
- (質問) 復元を実現するために、学校としてどのような取り組みをしたのか。
  - (回答) 同窓会長がたまたまその当時の町長でお骨折りいただいた。また後援会のトップには卒業生である某国会議員を据えることができ、うまく軌道に乗せられた。やはり政治力は大きい。また校長もかなり努力していたと思う。

○ (質問) 企画展はどんな方々が中心となって行っておられるのか。

(回答) 精力的に活動するのは少数のOB・OGだ。現職員は日々の教育活動が一杯で協力を望める状況にない。

○ (質問) 展示している貴重品はどのように管理しているのか。

(回答) 機械警備によってセキュリティが確保されている。

○ (質問) 文化財校舎を授業で活用することはあるのか。

(回答) 授業で連句の会を行っている。度まで整えているのか。

○ (質問) 照明及び空調の設備はどの程度まで整えているのか。

(回答) 照明設備は、復元の際に大幅に増強した。今日のような雨模様でも晴天の日とほぼ同じだ。空調はエアコンの冷房のみで暖房はついていない。

この後、館内の見学に移った。1階は学習室を除き、学校や建物の歴史に関する様々な資料が本格的陳列ケースに展示されている。2階は百人以上を収容できる講堂があり、ここが企画展や講演会の中心となっているという。そして予定の1時間半が過ぎ、巖浄閣を辞した。この頃には雨も上がり、薄日が射し始めた。

### 富山湾で見た「虹」と「蜃気楼」(?)

5時近くに宿泊の氷見温泉「永芳閣」に到着。富山大学人文学部副学部長大工原ちなみ氏(高27回卒)の推奨の宿だ。眼下に富山湾が広がり、遠くには立山連峰の山並みが霞んで見える。心癒される絶景は一幅の絵を見ているような気分になる。そして雨上がり、太陽が西に傾きかけるその時、北東の空に、くっきりとした七色の帯が眼に入った。富山湾に

架かる「虹の架け橋」だ。「虹を見て心が躍らなくなったら、死んだ方がましだ」と詠ったのは、イギリスの浪漫派詩人ワーズワース。大自然の最高の造作の妙に一行の誰もが心躍った。それどころか自然の摂理の粋な演出は、同時にもう一つあった。それは虹が海と接する所に、工場群らしき建物がゆらゆら揺れながら海面に浮かんで見える現象だ。これがそが当地によくでる「蜃気楼」のように思えた。(実はこれは早合点だった)

やがて、大工原教授もはせ参じてくれた懇親会が山田副会長(高15回卒)の司会のもとで始まる。大曾根副会長を皮切りに、様々な方々の力のこもったスピーチ、乾杯、自己紹介と続き、その後は談笑に花が咲く懇談の宴に移行。和やかな雰囲気の中、ひととき盛り上がる場面が発生する。それは「先ほど、蜃気楼のようなものが見えましたが、日本館全面改修は、蜃気楼で終わらせてはなりません」と、ある会員が語気を強めた時だ。これこそ、関係者全員の思いを率直に吐露したものにほかならなかったのだ。



「永芳閣」からの絶景。眼下に富山湾、遠くに立山連峰。さらに富山湾に架かる虹も瑞龍寺(右)と宝堂(共に国宝)。

### 【余録】今年の日本館のテレビ放映

日本館は、本校のシンボルであり、同窓生の郷愁の場。更には言えは国の宝物でもある。荘厳な偉容と計り知れない造形の豊かさが見る人を魅了する。それゆえ今年も様々な場面で活用され登場した(する)。その一部を紹介したい。

- テレビ BS朝日『建物遺産』(6月)
- BS日テレ『知られざる百年遺産』(7月)
- 映画 『天心』(12月)
- 小原流『插花』24年3月号
- 『ストリートジャック』25年2月号
- 同窓生 退職記念講義(5月)
- 茨城大学進修同窓会懇親会(11月)

### 瑞龍寺と魚津埋没林博物館も見学

翌日は、国宝「高岡山瑞龍寺」と特別天然記念物「魚津埋没林博物館」を見学。瑞龍寺は、加賀藩主前田利長公の菩提を弔うため、三代藩主利常が、寛文3(1663)年に建立した曹洞宗の寺院。博物館は、2000年前の杉の原生林が川の氾濫で埋もれ、その後海面の上昇により、海面下に埋没していたものを発掘・展示している。前日の巖浄閣に続き、これらの貴重な文化遺産・自然遺産にも直接目にふれることで、長い時間の流れを経ってきた生きとし生ける森羅万象の息遣いを感じ取り、ととともに、朽ち果ていくものを整備・保存していく貴さと大切さを痛感した。以上で視察を終え、午後1時過ぎには帰路につく。高速道路を走り続けて5時間余。土浦到着を間近にした車中では、視察事務担当の助川博士同窓会幹事(高21回卒)の進行で、複数の参加者から最後の挨拶をいただく。その中で「旧本館改修に向けた思いを、皆様と同様に私も共有できた。参加してよかった」との言葉が心を熱くした。そして午後7時前に土浦に無事降り立ち、解散となった。